

二〇一七年六月二三日 開催（グローバル・リテラシーとは何か：マイノリティー言語と社会の視点から考える（第二弾））

母語への意志——アイヌ語復興と言語的モダニティ

マーク・ウインチェスター

■ 講演者……マーク・ウインチェスター（本学日本研

究所専任講師）

■ 司 会……サウクエン・ファン

はじめに

私はアイヌ語の専門家ではありません。しかし、今回の講演会シリーズのテーマである「均質化が進む一方で、個々の言語文化の独自性が増す意識されるようになってきた」という、グローバル化の一面、あるいはその力学とアイヌ語との関係については、意外と関心があることに気づきました。なぜなら、それは、現在「グローバル化」と呼ばれている諸現象より遙かに直接的な均質化の強制力をもったサハリン島（樺太）、北海道島、クリル列島（千島列島）の日本国による入植植民地化がアイヌ語に対して引き起こした衝撃と、その衝撃の事実への対処の仕方を何らかの形で自分なりに見つけようと考えてきた明治以降のアイヌの著述家たちの試み

とどこかで重なっているように感じているからです。

私はアイヌ語の専門家ではありませんので、これまでアイヌ語を積極的に学ぼうとしてきませんでした。「奪われた言語」に対して海外出身者の私とその専門知識を身につけ、それを一般に広めることに関して、多少の懸念がありました。これから紹介するアイヌ語専門の言語学者である奥田統己氏がいうように、「アイヌ語の能力を身につけたいと考えるアイヌの人に協力するのは、もちろんアイヌ語研究者の社会的責任である」という考え方に私は共感を覚えます。ただ、そういう理由もありますが、私がアイヌ語をきちんと学んでこなかったのもっとも基本的な理由は単に忙しかったからです。

私の研究の大まかな課題は、アイヌの近現代の思想史の構築です。私の思想史の先生の一人は、思想史のことを次のように説明します。人々が考える思想や哲学は、個体から離れて発生はしないが、思想そのものは個体に限定されることはない。この事実から思想史という学問の狙いが導き出されま



マーク・ウィンチェスター先生

す。つまり、思想史が狙いとするのは、思想の発主体である個人の人物と、その人物が置かれた歴史的状况との間の緊張関係の中から、これまで見えてこなかった思想的な営為とその遺産となるようなものを、現在において新たな史的葛藤として掬い上げることです。⁽²⁾私の場合は、近現代、したがって明治以降のアイヌの著述家の様々な作品の中から思想的な営為を掬い上げて、現在にそれを読み返していく、ということになります。「なぜアイヌなのか」というのは、別に「アイヌ

だから」面白いことが書けるという意味ではありません。ただし、ある特定の歴史的な経験や扱い方を、アイヌは今アイヌとしてあるゆえに共通して持たされてしまったわけですから、そこは私の研究のポイントとなります。

より厳密に言えば、日露和親条約（一八五五年）と樺太千島交換条約（一八七五年）を経て、一八六九年に新政府が松前と蝦夷地またはその付属諸島を「北海道」と改称して以来、アイヌの著述家が自分たちの置かれた状況をどのように表現し、捉えてきたのかを分析して、系譜のようなものを作っていくことです。この歴史的な過程を経て、日本の中にもありながら、完全に「日本なるもの」ではないと見出されるアイヌの様々な著述家は、世界規模で考える重要な課題を提供してくれているのではないかと、思うのです。近代日本では、「アイヌ」や「琉球人」をとおして自らの先進性を確認してきた「日本人」というアイデンティティは、同時に「西洋」からの眼差しの中でたえず客体化されました。その一方、アイヌの著述家の多くは、「日本人」が持った知的関心から同時代の様々な問題を立ち聞きして、ときに近代日本社会の擁護者として、そしてときにそのもつとも鋭い批判者として、同じ近現代日本の知的遺産に貢献してきたのだと思います。しかし、これまで彼らの著作は、民族誌的な情報の供給源、アイヌ全般を代表するような扱い、あるいはせいぜい時代背景を読み解く

ための手がかりといったような扱いかされてこなかったのです。こうした状況を少しでも変えて、一つのアイヌ近現代の思想史の伝統を浮き上がらせることが私の研究の目的です。明治以降のアイヌの著述家のほとんどは、明治時代の旧土人学校の設置と旧土人児童教育規定に提唱されていたような日本語使用の義務化、または開拓という名の下での近代化する社会の中の差別とそれを懸念するアイヌ語の使用への警戒を含めたことから、日本語を使って自己表現してきました。このこともあって、私はそこまでアイヌ語を本格的に学ぶ必要性を感じずにきたのです。

しかし、今回の講演会では「ぜひともアイヌ語について発表してくれないか」ということでしたので、逆に、こうした私の研究課題とアイヌ語との関係を考える絶好のチャンスではないかと考えました。ですので、ここからが本題ですが、専門家によってきちんと研究されている内容のある発表として受け止めないで、こうした関心のある人がアイヌ語とアイヌ語の現状について手さぐりで考え始めた程度のもので聞いて欲しいと思います。結論から先に言いますが、私の一番の関心は、次のようなことになります。先ほど言いましたが、私が研究している作家たちは明治以降に生きた人たちがばかりで、アイヌ語と日本語のバイリンガルの人もいますが、アイヌ語についてはいくつかの単語や表現しか習っていない

人が多数です。しかし、作品、特に文学作品の中では、日本語の詩の音節に合わせたアイヌ語の作品、アイヌ語と日本語を意図的に混ぜて書かれた作品、先祖のアイヌ語の世界と自分の日本語の世界を対比的に扱った日本語で書かれた近代小説、ウエベケレ *uwepeker* (昔話)、ユカラ *yukar* (英雄叙事詩)、ヤイサマ *yaysama* (即興の歌) などのアイヌ語の口承文学の形をとった現代詩作などがたくさんあります。そこで、私が考えたいのは、こうしたものの中では、現代のアイヌ語復興のあり方には見えなくなっただけかもしれない、創作を通した、世界各地の多くの近代における少数言語文学ルネッサンに見られる言語的モダニティ(近代性)の瞬間が見て取れるのではないか、ということです。つまり、かつてのあり方には戻れないかもしれませんが、そのときそのときの、今現在の日本語とアイヌ語の表現世界と感覚のぶつかり合い(これまではよく「クレオール」や「異種混濁性」、「ちゃんぽん」などと表現されてきた現象)から、先ほど述べた歴史への問いと対処の仕方が試みられてきたのではないのでしょうか。そして、それは、実は、私の知り合いが今アイヌ語復興に一番大事なことが「流暢になる」とか「資料作成」とかというよりは、「母語への意志」ではないか、ということに重なるのではないかと思えます。これも、先ほど言及しました奥田氏の論考とも響きあう点です。



司会のファン先生

アイヌ語について

では、問題提起はこのような感じですが、ここで、決して私の専門ではないアイヌ語について、簡単な概要を述べておきます。アイヌ語は、当然ながら、今の北海道を中心に、サハリン島(樺太)、クリル諸島(千島列島)そして古くは本州東北北部でも話されていた、先住民族のアイヌのことばです。日本語とはまったく違う言語です。他の言語との親族関係は証明されていない、いわゆる孤立した言語になります。膠着

語・抱合語⁽³⁾であり、文法はSOV型です。アイヌ語の話者と日本語話者とはまた、少なくとも千年以上の間いろいろな形で交流があり、単語の借用の歴史も長いです。アイヌ語から日本語に入ったと思われる単語としては、誰もが知っている「トナカイ」がよく挙げられます。樺太アイヌ語の「トゥナハカイ(tunahkay)」から来ています。「ラッコ(rakko)」、「オットセイ」(アイヌ語の「unew」「ompe」から転化した中国語の当て字が日本に輸入されてさらに日本語読みにされたもの)、「シシヤモ」(アイヌ語では「susun 柳の葉(ススハム susu-ham)」に形が似ていることから)などもアイヌ語です。日本語からアイヌ語に入ったことばとしては、「トゥキ(tuk: 杯)」、「パッチパチ(pachi)」、「イク」(パスイ(iku) pasuy(樺酒籠))、「ノミ nomi(ノを折る=折む(日本書紀))」などが挙げられます。しかし、中川裕氏がいうように、「日本語における漢字(中国語)の影響に比べれば、「借用語は」ずっとわずかなものです⁽⁴⁾」。日本語では一〇まで和語で数えるのに対して、漢語の影響をそこまで受けていないアイヌ語はそれよりずっと大きな数まで数えられます。アイヌ語は「文字を持たない言語」だとよく言われます。そのためにも、アイヌの伝統的な精神世界を伝える豊かな伝承の伝統があるとも言われてきました。しかし、一方では、一世紀前からアイヌ自身をも含めた様々な人々が記録に努めてきました。江戸時代の

和人の記録もあれば、大正時代の知里幸恵のローマ字を用いたアイヌ語の記録、一九五〇年代の知里真志保のローマ字とカナ、一九七〇年代の萱野茂や葛野辰二郎のカナ記述、一九五〇～六〇年代の山本多助のカナ文字に独自文字を加えて書かれた記録などです。アイヌ語は、現在はカナ表記とローマ字表記を併用して書かれています。

現在、アイヌ語の話者はほんのわずかです。アイヌ語を話せる人は全員日本語のバイリンガルです。アイヌ語だけで生活しているコミュニティも存在しません。そして、アイヌ語は「消滅の危機に瀕した言語」と呼ばれています。ただ、一九世紀に始まった大学でのアイヌ語の研究の影響もあり、アイヌ語の記録は「消滅の危機に瀕した言語」の中では比較的多くあります。これらの多くは、伝承文学を記録したものです。アイヌ話者が少ない中、アイヌ語を学ぶ楽しさの一つとして、中川氏が挙げているのは、この伝承文学の物語世界に触れることです。「アイヌ語で物語を読めば、そのような日本語のイメージに縛られず、人間と人間の取り巻く全てのものゝ動物、植物、火や水など自然界の様々な現象、人間の作った家や舟や白などの道具類までが、それぞれの個性や意志をもって生き生きと交流しあい、ひとつの社会をつくっている、そんな世界をまざまざと眼に浮かべることができます⁽⁵⁾」と。

アイヌ語の活性化を目指した試み

一九九七年のアイヌ文化振興法（アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律）の制定以来（またはそれ以前からもあります）、アイヌ語の活性化を目指した様々な試みも現在行われています。毎年行われるアイヌ語の弁論大会「イタカンロー iakkan ro」（みんなで話しましょう）、伝統的な歌を使ったミュージシャンやパフォーマンsgループの活動、カムイにお祈りを捧げる「カムイノミ kamuyomi」における儀礼のことばの復興、また予算問題などありますが、各地でアイヌ語教室も開かれています。最近では、北海道平取町二風谷でのニュージランドのマオリ族のマオリ語復興にも使われたコールアンドレスポンスをベースとしたマオリ語学習法であるテ・アタアラングを取り入れたアイヌ語学習の試みも注目を集めています。

アイヌ語復興運動の課題と「母語への意志」

しかし、学習者と文化振興政策立案者との意識のギャップも指摘されてきました。例えば、冒頭で挙げた奥田統巳氏は、「アイヌ語復興運動の現状とアイヌ語研究者の責任」という二〇〇一年に発表された重要な論考で、アイヌ文化振興政策の枠組みに対して一つの危険性を指摘しています。それは、政策においてアイヌ語は「民族としてのアイデンティティの中

核をなす」ものとして謳われていることに起因します。今現在、多くのアイヌがアイヌ語を母語として習得することができないのは、日本の近代国民国家の形成に伴った自分たちが暮らしていた土地への入植による植民地化に原因があります。そのような状況から「民族としてのアイデンティティの中核をなす」ものとしてアイヌ語の地位を確保しようとする、そうしたアイヌはどのように自分たちのアイデンティティを考えれば良いのでしょうか。奥田氏は、こうして、「現代に生きるアイヌの人は、自らの『民族として証』を得るために今の自分の生活のかなりの部分を『アイヌ語を習得するために』捨てざるをえなくなるかもしれない」という、一種のアイデンティティの強制が政策に内包されてしまっているのではないかと、という懸念を示しています。

その代わり、奥田氏は、アイヌのアイヌ語の話し手たちの(習得状況を問わず)母語への希望や「思い」というものが、アイヌ語復興運動の中でもっとも重要視すべきではないかと提案しています。その「思い」もまた、様々です。そうした話者たちにとっては、日常会話でのアイヌ語の復興を望むこともあれば、先祖供養の維持や一族の先祖の由来の伝達が脅かされないように継承されることが重要視されるかもしれない。アイヌ語を流暢に話せるようにはなれないかもしれないけど、単語単語を覚えていくことに対する喜び。アイヌ

へとつながる歴史を意識しながら、その事実への対処の仕方を見つめる必要はあるという点で、アイヌはずでにその他の人々とは異なる出発点に立っています。そして、そこそが現在、そしてこれから未来においても、アイヌの「民族のアイデンティティ」の出発点でもあります。その中で、アイヌはアイヌ語の位置づけを行います。何が自分たちの「アイデンティティの中核」なのかは言われるまでもありません。そして、アイヌ語を習得していなくとも、このようなアイヌ語の位置づけ、要するに「母語への意志」は、近代、連続してずっと行われてきたのではないかと、というのが私の今日の仮説です。

最後に

私の研究対象に入るいくつかの作家の試みを紹介して終わりたいと思います。

■バチエラー八重子(一八八四〜一九六二)

『若き同族(ウタリ)に』(一九三一年)岩波現代文庫、二〇〇三年。

■戸塚美波子(一九四八〜)

『一九七三年ある日ある時に』創英出版、一九八一年。

■佐々木昌雄(一九四三〜)



会場からの質問に答えるウィンチェスター先生

『呪魂のための八篇より成る詩稿 付一篇』 深夜叢書者、
一九六八年。
■土橋芳美（一九四七〜）
『痛みへのペンリウク…囚われのアイヌ人骨』 草風館、
二〇一七年。

(1) 注

奥田統巳「アイヌ語復興運動の現状とアイヌ語研究者の責任」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』4、二〇〇一年、一〇九頁

(2) (3)

孫歌『竹内好という問い』岩波書店、二〇〇五年、ix
言語の形態による分類。「膠着語」は実質的な意味を表す語（名詞や活用語の語幹など）に文法的な意味を表す接辞（助詞、活用語尾など）が付属して文を構成する言語で、日本や朝鮮語などがある。「抱合語」は文を構成する要素が密接に結びついて全体で一語となるようにみえる構造をもつ言語で、エスキモー語やアイヌ語が代表的。

(4)

中川裕『ニュー・エクスプレスアイヌ語』白水社、二〇一三年、九頁

(5)

同上書、九一〇頁